

非連続wh...-moの認可に関する統語分析

西岡, 宣明

九州大学大学院人文科学研究院文学部門英語学・英文学 : 助教授 : 英語学

<https://doi.org/10.15017/4982>

出版情報 : 文學研究. 102, pp.21-43, 2005-03-31. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

非連続wh...-moの認可に関する統語分析

西 岡 宣 明

1. はじめに

(1)に示されるような日本語の「何も、誰も、どこへも」といった不定代名詞 (indeterminate pronouns (Kuroda (1965)) +mo (以下wh-moとして言及) は、否定辞と共に用いられなければならない。また、wh-moは、(2)に示されるようにwh句とmoが離れて生じることもできる(以下この場合を非連続wh...-moと呼ぶ)。

- (1) a. 太郎は何も食べ*(なかつ)た。
b. 誰も今日の授業には来*(なかつ)た。
c. 正月にはどこへも行*(かなか)った。

- (2) a. 太郎は何を買いもし*(なかつ)た。
b. 花子は太郎が何を買ったとも思*(わなか)った。

Wh(...)-moは、否定辞を要することから、従来否定対極表現(NPI)と広く呼ばれているが、西岡(2003)では、英語の否定数量詞との類似性に基づき、NPIというより、否定呼応表現(NCI)と呼ぶべきものであることを主張している(cf. Watanabe (2001, 2002))。その上で、wh(...)-moの振る舞いは、否定辞(-na)がNegPを投射し、wh(...)-mo句(NCI)がNeg主要部と否定呼応のために顕在的に局所的関係をつくるとする分析が経験的にも、理論的にも妥当であることを論じている。但し、非連続wh...-moに関しては、さらなる制約が働くことにも言及している。本稿は、非連続wh...-mo構文について考察を深め、その背後にある一般制約を明らかにすることを目的とする。非連続wh...-moに関しては、Kishimoto (2001)の興味深い分析があるが、体系的な反例が存在することを指摘する。本稿では、moが焦点化機能を果たすことに着目し、Chomsky (2000, 2001b)のAgreeに基づく分析が経験的にも妥当で

あるばかりでなく、制約の一般性という点でも好ましいことを論じる。

本稿は、以下の構成である。まず、次節で西岡(2003)で論じられているwh(...)-moの認可条件を概観した後、それだけでは非連続wh...-moの振る舞いは捕らえきれないことを見る。3節で、Kishimoto(2001)の分析を概観し、その問題点を指摘する。4節でmoが焦点化機能を果たすことから、節構造としてTPの上位にFocPがあることを仮定したAgreeに基づく代案を述べる。そして、その分析が、Kishimoto(2001)の反例を含むより広範な事例を適切に説明することを論じる。5節でさらにその分析のメカニズムは、英語のNPIの認可に働くメカニズムであることを確認し、分析の一般性を主張する。6節で論をまとめる。

2. wh(...)-moの認可条件 — 西岡(2003)

日本語の否定文は、否定辞(-na)が義務的に必要であり、英語のように否定副詞や否定数量詞のみで否定文を表すことができない。

(3) a. 太郎が、決して/めったに、魚を食べ*(なかつ)た。

b. 誰も授業に来*(なかつ)た。

(4) a. John *never/seldom* ate fish.

b. *Nobody* attended the class.

西岡(2003)は、このことは日英語の否定文の節構造の違いにあると考え、(5a)の構造を日本語の否定文の基本的節構造として提案し、西岡(2002, 2005)の英語の基本的節構造(5b)と対比させている。

(5) a. [TP [NegP [vP VP v]] Neg] T](日本語)

b. [PolP Pol [TP T [vP v VP]]](英語)

日本語の-naは、Neg主要部であり、常に顕現し、それ自体で否定文を認可するのに対し、英語では、PolがTPの上であり、基本的にTP内の否定要素とのAgreeにより否定素性を獲得し、否定文を認可すると考える。Agreeとは、Chomsky(2000, 2001b)で提案された素性照合のメカニズムで、ここでは、それに基づき否定要素の解釈可能な[+NEG]素性がPolに移動すると考える。¹ この違いを表す端的な証拠は、日英語における主語の部分否定解釈の違いに見られる。²

(6) a. Everyone isn't there. (NEG > every, every > NEG)

b. [PolP Pol [TP *everyone* isn't_t[+NEG] [NegP t_{n't} [vP *teveryone* tis there]]]]



(6a)の文では主語の部分否定の解釈(NEG > every)が可能である。これは、notにある否定素性がPolに移動すると考えれば、c-統御(command)関係によって捕えられる。³ 他方、日本語の場合、主語に普遍数量詞がくると、目的語の場合と異なり、部分否定の解釈がない(Miyagawa (2001))。

(7) a. ジョンが全部を食べなかった(よ/と思う) NEG > all, (*all) > NEG

b. 全員がその料理を食べなかった(よ/と思う) *NEG > all, all > NEG

この事実は、日本語の節構造にPolPがなく、(8)に示されるように主語が顕在的に[Spec, TP]へと移動している(Miyagawa 2001)とすると、否定要素(Neg)とのc-統御関係でうまく説明される。

(8) [TP Subj [[NegP [vP t_{subj} [[VP Obj V] v]] Neg] T]



また、西岡(2003)では、西岡(1998)、Nishioka(1999, 2000)に基づき、wh-moは本質的に英語のNPIとは異なり、no(...) (no one, nothing, nowhere)である否定数量詞(NegQ)に対応するものとして捕える必要があることを論じている。その根拠としてHaegeman(1995:129)がZanuttini(1991)に基づき示唆したNPIをNegQと区別する統語テストがある。そのテストの1つは、almostに類する語により修飾されうるか否かによるものである。NegQは修飾されうるのに対し、典型的なNPIであるanyは修飾されることができない。

(9) a. I said almost *nothing*.

b. *I didn't say almost *anything*.

wh-moは以下のように何の問題もなく「ほとんど」により修飾される。

(10) a. 僕はほとんど何も言わなかった。

b. ほとんど誰も太郎を知らなかった。

また、もう1つのテストは、単独で質問に対する否定の答えとなるか否かというものである。

(11) A. What did you buy?

B: Nothing / *Anything.

(11B)に示されるようにNegQはそれが可能であるが、NPIは不可能である。この点においてもwh-moはNegQに類する。

(12) A: 何(を)買ったの?

B: 何も

このような点から、日本語の否定文の節構造は(5a)と仮定でき、wh-moはNegQと同一視できる。従って、顕在的にNeg主要部を要する日本語において、wh-moはNPIではなく、複数の否定要素があるにも関わらず一つの否定の意味しか生じさせない否定呼応表現(NCI)ということになる。このことから、西岡(2003)は、wh(...)-moの認可条件として、(13)を提案している。^{4, 5}

(13) wh(...)-moの認可条件: wh(...)-mo(NCI)は、(a)構成素として顕在的に [Spec, NegP]に移動するか、または、(b)Negの補部、すなわちvPでなければならない。⁶

(13a)の顕在的移動を支持する例は、以下のようなものである。

(14) a. 誰も来なかった。

b. 太郎が何も食べなかった。

(15) a. 学生が、誰も来なかった。

b. 太郎が、くだものを何も食べなかった。

c. 誰も学生が来なかった。

(16) a. [TP pro_i [NegP dare-mo_j [vP t_i t_j ko]-nakat]-ta]

b. [TP Taroo-gai [NegP nani-mo_j [vP t_i pro t_j tabe]-nakat]-ta]

(17) a. [TP gakusei-gai [NegP dare-mo_j [vP t_i t_j ko]-nakat]-ta]

b. [TP Taroo-gai kudamono-o_j [NegP nani-mo_k [vP t_i t_j t_k tabe]-nakat]-ta]

c. [TP dare-mo_j [TP gakusei-gai [NegP t_j [vP t_i t_j ko]-nakat]-ta]]

(14)(15)のそれぞれの文の顕在的な構造を表したものが、(16)(17)である。ここで、wh-moが顕在的に[Spec, NegP]にあるか、[Spec, NegP]を経由して移動している。(16)において、proが主語位置、目的語位置に生じているが、それは(15)のようにwh-moは顕在的な主語、目的語と共起でき、wh-mo自体は項ではなく項を修飾する付加詞であると考えられることに基づく(cf. Kawashima and Kitahara (1992)、Aoyagi and Ishii (1993))。⁷ ここで、wh-moが実は付加詞であり、主格照合のために

[Spec, TP]へ移動する必要がないとすると、(14a)の文もwh-moの顕在的な移動を想定しなくても単純にNegによるc-統御によって捕らえるべきであると考えられるかもしれない。しかしながら、それでは、(15c)が説明できず、この事実はwh-moの顕在的照合移動分析の妥当性を示す。また、以下の例をみられたい。

(18) a. *花子が[太郎が何も食べたと言わなかった。

b. ?*太郎が[次郎がどこへも行ったと思わなかった。

これらは従来、wh-moとNegとの同一節内条件によって記述されてきた(McGloin (1976), Kuno (1995))ものであるが、これらの顕在的構造は、(19)であると考えられ、(13)の違反として、その非文法性が正しく捕らえられる。

(19) [TP...[NegP...[CP [TP...wh-mo...T]C]...Neg]T]

この分析は、さらに以下のような例によっても支持される。

(20) a. ?*太郎は喜んで何も食べなかった。

b. 太郎は何も喜んで食べなかった。

c. 太郎は幸いに何も食べなかった。

(21) a. ?*Taro-wa [NegP [_{vP} yorokonde nani-mo tabe]-nakat]-ta

b. Taro-wa [NegP nani-mo [_{vP} yorokonde tabe]-nakat]-ta

c. Taro-wa saiwaini [NegP nani-mo_i [ti tabe]-nakat]-ta

「喜んで」といったような動詞句修飾副詞によりwh-moの顕在的な位置が判断できる。(20a)のようにwh-moが副詞に後続する場合、その構造は(21a)のように考えられ、(13)の違反としてその非文法性がうまく捕えられる。他方、(20b)のようにwh-moが副詞に先行する場合、その構造は(21b)のように考えられ、(13a)を満たしているので文法的であるといえる。また、(20c)のようにTPを修飾している文副詞が用いられた場合、wh-moが副詞に後続していても、その構造は(21c)のように考えられ、(13a)を満たしているために文法的であるといえる。

非連続wh...-moの例は以下のようなものである。

(22) a. 太郎が何を買ひもしなかった。

b. 花子が太郎が何を買ったとも思わなかった。

c. 花子が誰が車を買ったとも思わなかった。

(22)の適格文の顕在的な構造は、主語とNCI(註6参照)の顕在的な移動を仮定する

分析ではそれぞれ、概略以下のように表される。

- (23) a. Taroo-gai [NegP [vP ti nani-o kai-mo]^{NCI} si-nakat]-ta
 b. Hanako-gai [NegP [CP Taroo-ga nani-o kat-ta to-mo]^{NCI} [vP ti tj omow]-
 anakat]-ta
 c. Hanako-gai [NegP [CP dare-ga kuruma-o kat-ta to-mo]^{NCI} [vP ti tj omow]-
 anakat]-ta

(23a)では、vPがNCIであり、(23b, c)ではCPがNCIである。(23b, c)ではNCIが[Spec, NegP]へ移動しており、認可条件(13a)を満たしている。(23a)はその移動がない(13b)の認可の例である。wh(...)-moの認可条件として2つの認可方法があるのは理論的に好ましくないと思われるかもしれないが、(13)がwh(...)-moとNegとの否定呼応のための局所条件であることを考えればむしろ理に適っているといえる。Negの補部であるvPがNCIの場合、その局所条件をすでに満たしていると考えられ、それは、動機づけのない余分な操作は認めない経済性の原理から導かれるからである。

この分析は以下の非文法性も正しく説明する。

- (24) a. ?*花子が太郎が何を買いもしたと思わなかった。
 b. *花子が太郎がどこへ行きもしたと言わなかった。
 (25) a. ?*Hanako-gaj [NegP [vP tj [Taroo-gai [vP ti nani-o kai-mo]^{NCI} si-ta] to omow]-
 anakat]-ta
 b. *Hanako-gaj [NegP [vP tj [Taroo-gai [vP ti doko-e iki-mo]^{NCI} si-ta] to iw]-anakat]-
 ta

(24)の文はその顕在的構造が(25)に示されるように、埋め込み節のvPがNCIであるが、NegPは主節にあるので(13)を満たすことはできない。故に非文法的なのである。さらに、この分析は、以下の文の非文法性も正しく捕える。

- (26) a. *太郎は誰を熱心にも褒めなかった。
 b. *太郎は誰に本も渡さなかった。
 c. *誰が太郎が車を買いましたと思わなかった。
 (27) a. Taroo-wai [NegP [vP ti dare-o [nessin-ni-mo]^{*NCI} home]-nakat]-ta
 b. Taroo-wai [NegP [vP ti dare-ni [hon-mo]^{*NCI} watas]-anakat]-ta

c. Dare-gaj [NegP [vP tj [CP Taroo-gai [vP ti kuruma-o kai-mo]^{*NCI} si-ta to]omow]-
anakat]-ta

(26)の文の顕在的構造はそれぞれ(27)のようになる。(27a)では副詞にmoが付き、また(27b)では、直接目的語にmoがついている。また、(27c)では、埋め込み節の動詞(v-V)にmoがついているが、wh句は主節主語である。いずれの例においてもmoのついた要素の投射内にwh-句がなく、NCIとしての認可条件(13)を満たすことができないために非文法的であると言える。⁸

以上のように(13)はwh-moと非連続wh...-moの分布を正しくとらえる。しかしながら、以下のような例がこの分析だけでは捕らえられない。

- (28) a. *誰が花子を褒めもしなかった。
b. *何が読まれもしなかった。
c. *太郎に何が歌えもしない。

これらは主語がwh-句となった非連続wh...-moの例であるが、(22)の例と比べて明らかに文法性が低い。本分析がこれまで採用してきた動詞句内主語仮説(註2参照)に基づくと、これらの文の顕在的な構造は以下のようになる(cf. (23a))。

- (29) a. *Dare-gai* [NegP [vP ti Hanako-o home-mo]^{NCI} si-nakat]-ta
b. *Nani-gai* [NegP [vP ti yomare-mo]^{NCI} si-nakat]-ta
c. Taroo-nii [NegP [vP ti nani-ga utae-mo]^{NCI} si-na]-i⁹

すなわち、これらの例ではNegPの補部であるvPがNCIであり、NCIの認可条件(13b)を満たしている。このことは、非連続wh...-moには(13)のNCIの認可条件とは別のwh句とmoとの相対的位置関係に関する制約があることを示唆する。

3. Kishimoto (2001)——vP-moにおけるvP内外要素の非対称性

非連続wh...-moに関して、Kishimoto (2001)は、LFにおいてwh句(indeterminate pronoun)がmoに束縛されることがその認可条件と考えるが、(30)のようにwh句がmoのscope内にあることにより束縛が成立すると想定している。ここでscopeは、(31)の領域(domain)に基づき定義されると主張している。すなわち、Kishimoto (2001)は、(32)をwh(...)-moの認可条件として提案しているといえる。

- (30) An indeterminate pronoun can be bound by *mo* if it falls within the scope of

mo.

(Kishimoto (2001:601))

(31) Y is in the domain of a head X if it is contained in Max(X), where Max(X) is the least full-category maximal projection dominating X. (ibid.)

(32) wh-句は、LFにおいてmoの領域内になければならない。

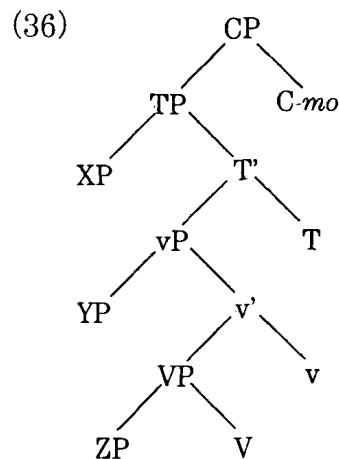
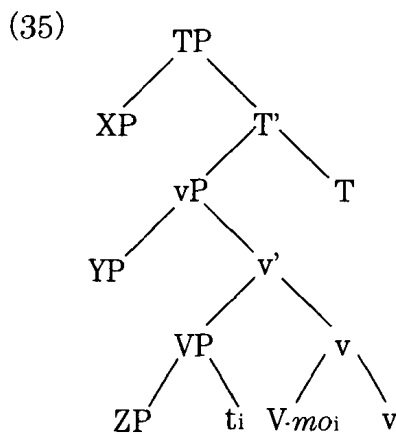
Kishimotoの分析では、(22) (33)の文の文法性と(28) (34)の非文法性の違いは(35) (36)のLF構造に基づき、(32)により捕らえられる。

- (22) a. 太郎が何を買いもしなかった。
 b. 花子が太郎が何を買ったとも思わなかった。
 c. 花子が誰が車を買ったとも思わなかった。

- (33) a. 太郎はどこから/どこで走りもしなかった。
 b. 太郎はどこに行きもしなかった。
 c. 太郎は誰と東京へ行きもしなかった。

- (28) a. *誰が花子を褒めもしなかった。
 b. *何が読まれもしなかった。
 c. *太郎に何が歌えもしない。¹⁰

- (34) a. ?*誰を_i 太郎は _{ti} ほめもしなかった。
 b. ?*どこへ_i 太郎が _{ti} 行きもしなかった。
 c. *太郎はいつ/どのような理由で走りもしなかった。



ここで、動詞(V)についてのmoは音形をもたない軽動詞(v)へと顕在的に移動し、主語はTPの指定部へと顕在的に移動すると想定している。従って、wh句は(22a)

(33)においては、(35)のYP(ZP)に対応する位置にあり、また(22b, c)においては、(36)のXP、YP(ZP)に対応する位置にあり、いずれも(32)を満たす。¹¹ 他方、(28)(34)においては、wh句は(35)のXPに対応する位置にあり、(32)を満たすことができないのである。

Kishimoto (2001)の分析は、西岡 (2003)で扱えなかった例を説明でき、優れているように思われるかもしれない。しかしながら、この分析には以下に述べる理論的、経験的な問題がある。

この分析はwh句がmoにより束縛されることをwh(...)-moの認可条件としているにも関わらず、c-統御に基づく通例の束縛の定義と異なる(31)に基づく概念(30)を導入している。そもそも何故(31)のような概念がwh-句のmoによる束縛に働くのか不可解であるし、不可欠な基本操作であるMergeから導出されない構造関係は文法操作において機能しないとする近年のミニマリストプログラムの考え方(Chomsky (2000, 2001b))が正しいとすると、この提案は認められない。^{12, 13} また、この分析では以下のような例が説明できない。

- (37) a. 何の/どの分野の専門家が政府の見解を疑いもしなかった。
 b. どんな(に)面白い論文が読まれもしなかった。
 c. 誰の責任が問われもしなかった。
 d. 太郎には何の取り柄がありもしない。

これらの文はいずれもwh句が主語の一部に含まれ(35)のXPに対応する部分にあり、wh句がmoの領域(vP内)にないにも関わらず、多くの話者に容認され、(32)に基づく分析の体系的な反例といえる。^{14, 15}

以上の点を鑑みて、次節で基本操作Agreeと基本関係概念(註12)に基づく代案を提出する。

4. 代案

4.1. moの焦点化機能

moが、焦点化機能を果たすことは、wh句を伴わない以下のような事例に関してすでに独自に分析されている(Kuroda (1965)、Aoyagi (1998, 1999))。¹⁶

- (38) a. (昨日パーティで花子が歌を歌っただけでなく、)太郎がピアノを弾きもし

た。

b. 太郎が、パーティで(ギターだけでなく、)ピアノを弾きもした。(=ピアノも弾いた。)

c. 太郎がピアノを(触っただけでなく、)弾きもした。

括弧内の対比的記述から明らかなように(38a)では、太郎の行為(vP)、あるいは出来事(TP)が焦点化され、(38b)では目的語(ピアノ)が焦点化され、(38c)では、動詞(弾く)が焦点化されている。このようなmoの焦点化機能に着目し、本稿では節構造として(39)のようにTPの上にFocPがあると想定し、(40)を仮定した上で、moとFocとの間でAgreeが働き、moの[+FOC]素性がFocに移動することを提案する。¹⁷

(39) [FocP [TP [NegP [vP VP v] Neg] T] Foc]

(40) a. Focは解釈不可能な[uFOC]素性とEPP素性を持ちうる。

b. moは解釈可能な[+FOC]素性と解釈不可能な[ufoc]素性をもつ。

TPの上にFocPがあることは、ヨーロッパの言語に関して提案されてきているが、現代日本語にもそれを想定することは、普遍文法的視点から理に適っているといえる。^{18, 19} また、(40)の仮定は、Chomsky (2000:128)がwh疑問文に対して示唆した(41)と並行的なものである。

(41) a. Cは解釈不可能な[Q]([uQ])素性とEPP素性を持ちうる。

b. wh-句は解釈可能な[+Q]素性と解釈不可能な[wh]([uwh])素性をもつ。

そして、wh(...)-moのwh句は本来的にmoによる焦点化要素であると考え、(42)を仮定し、(43)を提案する。(この提案においては、wh句の認可にKishimoto (2001)が提案した複雑な領域の概念(31)は不要であることに注意されたい。)

(42) wh(...)-moのwh句は、[+FOC]をもつ。

(43) wh(...)-moのwh句は、Focのもつ[+FOC]にc-統御されることにより認可される。

4.2 vP内外wh句の非対称性

以上に基づき、いかに非連続wh...-moが分析されるかを具体的にみる。

(22) a. 太郎が何を買いもしなかった。

b. 花子が太郎が何を買ったとも思わなかった。

c. 花子が誰が車を買ったとも思わなかった。


(33) a. 太郎はどこから/どこで走りもしなかった。

b. 太郎はどこに行きもしなかった。


c. 太郎は誰と東京へ行きもしなかった。

これらの文法的な例はいずれも(44a)あるいは、(44b)に示されるようにmoとFocとのAgreeが成立した結果、[+FOC]素性がmoからFocへと移動し、wh-句をc-統御して、適切に(43)を満たす。

(44) a. [FocP [TP ... [NegP [vP [VP wh_[+FOC] tv] V-v-mo_{[+FOC]_[ufoe]] NCI Neg]T]Foc_[uFOE]]}



b. [FocP [TP ... [NegP [CP (...) wh_[+FOC] (...) C]-mo_{[+FOC]_[ufoe]] NCI V-v Neg]T]Foc_[uFOE]]}



他方、非文法的な例では、(43)が成立しない。

(28) a. *誰が花子を褒めもしなかった。

b. *何が読まれもしなかった。

c. *太郎に何が歌えもしない。²⁰

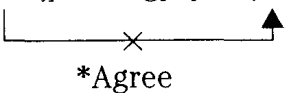
(34) a. ?*誰を_i太郎は_{ti}ほめもしなかった。

b. ?*どこへ_i太郎が_{ti}行きもしなかった。

c. *太郎はいつ/どのような理由で走りもしなかった。

これらについては以下のように示される。

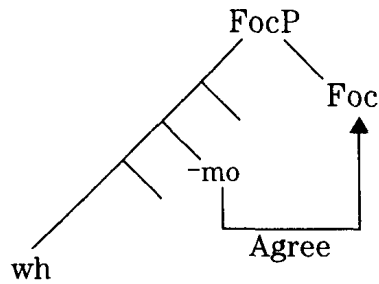
(45) [FocP [TP wh_[+FOC]] [NegP [vP twh [VP ... tv] V-v-mo_{[+FOC]_[ufoc]] NCI Neg]T]Foc_[uFOC]]}



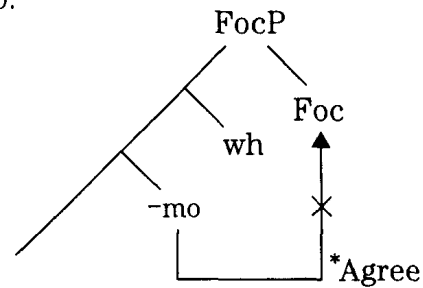
ここでは、moとFocのAgreeが成立しない。その結果、Focが[+FOC]を獲得することもできず、wh句をc-統御することもできない。この点を分かりやすくするために、簡略化して、先にあげた文法的な場合と対比して、wh句とmoとFocの構造的な位置関係を示すと以下のようなになる。(46a)が(44)を表し、(46b)が(45)を表す。ここでは線的順序は無視する。)

非連続wh...-moの認可に関する統語分析

(46) a.



b.

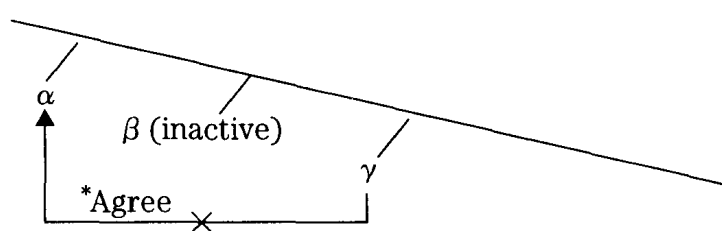


すなわち、文法的なパターンの場合、moがwh句を非対称的にc-統御しているのに対し、非文法的なパターンの場合、wh句がmoを非対称的にc-統御し、FocとのAgreeの経路にあるといえる。従って、(45)においてAgreeが成立しないことは、FocとmoのAgreeの経路にあるwh句がAgreeを阻止していると考えられ、Agreeに関して、Chomsky (2000)が独自に提案する制約(47)により捕らえられる。(wh句はしかるべき解釈不可能な素性をもっているとは考えられず、inactiveであると考えられる(註1参照)。)

(47) Defective Intervention Constraints (DIC) : In structure $\alpha > \beta > \gamma$, where $>$ is c-command, β and γ match the probe α , but β is inactive so that the effects of matching are blocked. (Chomsky 2000:123)

これは(48)のように図式化でき、ここではFocが α 、wh句が β 、moが γ に対応する。

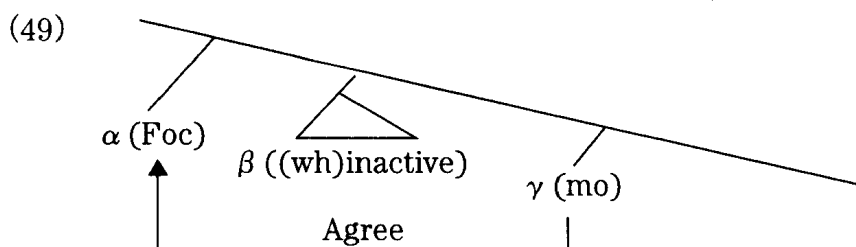
(48)



この分析では、前節でKishimoto (2001)の反例としてあげた(37)のような例も正しく捕えうる。

- (37) a. 何の/どの分野の専門家が政府の見解を疑いもしなかった。
 b. どんな(に)面白い論文が読まれもしなかった。
 c. 誰の責任が問われもしなかった。
 d. 太郎には何の取り柄がありもしない。

これらにおいては、wh句が主語の中に埋め込まれている。従って以下に表されるように、wh句はmoとFocとのAgreeの経路がなく、Agreeの適用を妨げない。それ故に(44)の場合と同様にFocが[+FOC]を獲得し、首尾よく(43)を満たしうる。



このように本稿の分析は、文法に独自に必要な操作とそれに関する制約に基づくものであり、理論的に好ましいだけでなく、経験的にKishimoto (2001)の分析より優れているといえる。

4.3. wh句を伴わない場合

本稿の分析は、wh句を含まない(38)に独自にみられるようなmoの焦点化機能を考慮し、焦点化を受ける要素との相対的位置関係に着目したものと見える。従って、必然的にwh句を含まないmoによる焦点化機能をもつ文に対しても、本分析が適用されることが予測される。

(38) a. (昨日パーティで花子が歌を歌っただけでなく、)太郎がピアノを弾きもした。

b. 太郎が、パーティで(ギターだけでなく、)ピアノを弾きもした。(=ピアノも弾いた。)

c. 太郎がピアノを(触っただけでなく、)弾きもした。

(50) a. (花子だけでなく、)太郎もピアノを弾いた。

b. ??(花子だけでなく、)太郎がピアノを弾きもした。

(50b)は、太郎がピアノを弾くという出来事が焦点化されている解釈は可能であるが、(50a)と同じ解釈の主語のみが焦点化されている解釈は難しい。すなわち、焦点化される要素がwh句の場合と同様のパターンが観察される。このことは、以下のような焦点を明示する文脈に照らして考えると、より明らかになる。

(51) A: (花子だけでなく)誰がピアノを弾いたの?

B: ??太郎が(ピアノを)弾きもしたよ。(Cf. 太郎も(ピアノを)弾いたよ。)

同じパターンで目的語が焦点化されている場合と比較されたい。

(52) A: 太郎は、(ピアノだけでなく)何を弾いたの？

B:(彼は)ギターを弾きもしたよ。(Cf.(彼は)ギターも弾いたよ。)

(38)の文の関係する部分の焦点化情報と構造を明示したものが、(53)である。((52) Bは(53b)と同様である。)ここでは便宜上、焦点化解釈をうけるものを下線で表す。

(53) a. [_{FocP} [_{TP} Taroo-gai [_{vP} ti [_{VP} piano-o tv] hiki-v-mo] si-ta] Foc]

b. [_{FocP} [_{TP} Taroo-gai [_{vP} ti [_{VP} piano-o tv] hiki-v-mo] si-ta] Foc]

c. [_{FocP} [_{TP} Taroo-gai [_{vP} ti [_{VP} piano-o tv] hiki-v-mo] si-ta] Foc]

これらの事例においてもwh句と同様に焦点化要素は[+FOC]を有すると考えられ、(42)(43)で述べたwh句の場合と同様のメカニズムが働いていると考えられる。従って、(53)において、下線部で表した焦点化要素は、moとFocのAgreeの経路ではなく正しく認可される。他方、(50b)((51B))は、(54)の構造をもつ。

(54) [_{FocP} [_{TP} Taroo-gai [_{vP} ti [_{VP} piano-o tv] hiki-v-mo] si-ta] Foc]

これは、moとFocのAgreeの経路に焦点化要素が介在する(48)の構造となり、(46b)と同様にDIC(47)によりmoとFocのAgreeが阻止され、焦点化要素の認可が行われない。以上のように本分析は、wh句以外の要素を焦点化する場合にもうまく説明できる。

さらに、以下の例を考えられたい。

(55) A:(花子の妹だけでなく)誰の妹がピアノを弾いたの？

B: ?太郎の妹が(ピアノを)弾きもしたよ。(Cf. 太郎の妹も(ピアノを)弾いたよ。)

この場合は、焦点化要素が主語の中に埋め込まれており、(37)の例と同様に(49)の構造をもち、焦点化要素がmoとFocのAgreeの経路にないために(43)に従い適切に認可が行われる。²¹

5. 英語のNPIの認可のメカニズム

英語のNPIの認可に関し、以下にみられるように主語と目的語(vP内要素とvP外

要素)の非対称性がある。

(56) a. **Anyone* did not attend the party.

b. John did not eat *anything*.

西岡(2005)は、英語の否定文の認可と否定対極表現(NPI)の認可のメカニズムを論じている。その分析の本稿での分析と関連のある部分をまとめると以下のようなものである。²²

(57) a. 英語の否定文の節構造として、以下(=5b))のようにTPの上位にPolPの投射がある。[PolP Pol [TP T vP]]

b. 英語の文否定は、Polが[+NEG]素性をもつことにより認可される。それは、PolとTP内の否定要素(NE)とのAgreeを通して得られる。

(58) a. Polは解釈不可能な[NEG](以下[uNEG])素性とEPP素性を持ちうる。

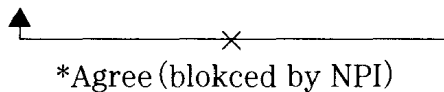
b. 否定要素は解釈可能な[+NEG]素性と解釈不可能な[neg](以下[uneg])素性をもつ。

(59) NPIは[+NEG]をもつ。

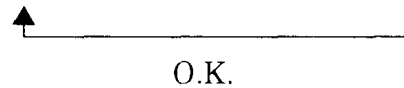
(60) NPIは、LFにおいて[+NEG]にc-統御されることにより、認可される。

(これらは、4節で論じた-moの認可ならびに、wh句(焦点化要素)の認可におけるの仮定と対応するものである(cf.(39)-(43))。この分析に基づくと、(56)の文はそれぞれ、以下のような派生構造をもつ。

(61) a. [PolP Pol_[uNEG] [TP NPI_[+NEG] T NE_{[+NEG][uneg]} . . .]]



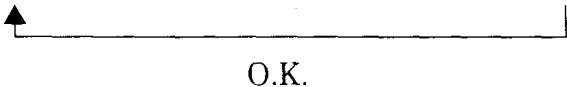
b. [PolP Pol_[+NEG] [TP (. . . .) NE_{[+NEG][uneg]} . . . NPI_[+NEG] . . .]]



(61a)では、NEとのPolとのAgreeが経路にあるNPIにより阻止され(DIC効果(47)(48))、派生が破綻し、NPIも認可されない。他方、(61b)では、NPIはNEとPolとのAgreeの経路上にないため、Agreeが適用し、NPIは適切に認可される。また、以下の例は主語の中にNPIがあり、否定要素(NE)によってc-統御されていないにも関わらず、文法的な例である。

- (62) a. Pictures of *anyone* did *not* seem to be available. (Boeckx 2000:362)
 b. A good solution to *any* of these problems does *not* exist. (Hoeksema 2000:136)

ここでは、以下に示すようにNEとPolとのAgreeが適用し、NPIは適切に認可される。

- (63) [PolP Pol_[+NEG] [TP[DP/CP...NPI_[+NEG]] T NE<sub>[+NEG]_[+neg]...]]

 O.K.</sub>

それは、NPIがNEとPolのAgreeの経路から外れるために、(37) (55B)と同様に(49)に表されるように(47)が働かないことによる。このように前節で論じたメカニズムは英語のNPIの認可現象にも働いておりその一般性が支持される。

6. まとめ

以上、本稿では、wh(...)-moの認可条件として提出された西岡(2003)の(13)を補足する考察を行った。

- (13) wh(...)-moの認可条件:wh(...)-mo(NCI)は、(a)構成素として顕在的に[Spec, NegP]に移動するか、または、(b)Negの補部、すなわちvPでなければならない。

(13)だけでは、vPにmoが付き、wh句が(LFにおいて)vP外にある要素の場合に非文法的になるという事実((28) (34))を説明できない。他方、Kishimoto (2001)の分析では、この事実は捕えられる。しかしながら、Kishimotoの分析は理論的にも好ましくないばかりか、体系的な反例が存在することを指摘した。代案として、moの焦点化機能に着目し、また、普遍文法的視点からTPの上にFocPを想定し、moとFocとのAgreeの適用に基づく認可条件(43)による分析を提案した。

- (43) wh(...)-moのwh句は、Focのもつ[+FOC]にc-統御されることにより認可される。

この分析により、非連続wh...-moの文法性は、文法に独自にその必要性が認められるAgree、Agreeに関する制約(DIC(47))、c-統御の概念に基づいて説明できることを示した。さらにこの分析はmoによる焦点化をうける要素がwh句以外の場合にも適用すること、英語の否定文ならびにNPIの認可の現象に働いているメカニズムと同一

であることを示し、その一般性を支持した。今後さらに、mo以外の焦点化にかかわる要素(wa、sae、sika等)の分析へ適用可能性を吟味し、また焦点化、否定以外の現象で本分析のメカニズムにより解明できる現象があるかどうかの考察を深め、分析の一般性を確認していきたい。

註

1. Agreeは(i) (ii)の仮定に基づく。
 - (i) a. Matching is feature identity.
b. G(oa) must be in D(P) (the domain of P(robe)), which is the sister of P (i.e. c-command domain of P).
c. The relation must satisfy locality condition of “closest c-command”.
(adapted from Chomsky 2000:122)
 - (ii) Goal as well as probe must be active for Agree to apply. (Chomsky 2001b:6)
 (ii)で、activeであるということは、しかるべき解釈不可能な素性をもたねばならないということである。
2. 主語の基底位置が動詞句内であるとする動詞句内主語仮説(VP-Internal Subject Hypothesis) (Kuroda (1988), Koopman and Sportiche (1991))を想定している。
3. 英語の部分否定についての詳しい分析はNishioka(2004)を参照。Pol想定を支持するその他の議論については、Nishioka(2002)、西岡(2005)を参照。
4. (13)は、wh-moがNCIであることから、理論的にも導出される。詳しくは、西岡(2003)を参照。
5. Wh-moの[Spec, NegP]への顕在的移動分析の先行研究として、Yoshimoto (1995, 1998)、Sohn (1995, 1996)を参照。
6. 非連続wh...-moの場合、wh句を含む-moのついた最小の構成素がNCIであると考えられる。
7. Wh-moが格助詞と共起できないこともその根拠として挙げられる。
 - (i) a. *誰もがりんごを食べなかった。
b. *太郎が何もを食べなかった。
 (ia)はwh-mo(誰も)が普遍数量詞の解釈なら、文法的であるが、その場合、ここで考察している否定を要するwh-moとはアクセントの位置が異なる別の語彙項目であると考えられる。(McGloin (1976), Kato (1985)参照。)
8. 以下のような例が一見(13)の反例であるように思われるかもしれない。(Cf. Kishimoto(2001))
 - (i) a. 太郎は何を疑問にも感じなかった。
b. 太郎は誰に相談もしなかった。
 しかしながら、これらの顕在的構造は、それぞれ以下のように考えられ、(13)の反例というよりむしろ、支持する例であると考えられる。((ia)においてSCは小節を表

し、(iib)においてφはsiに対応する音形のない軽動詞を表す。)詳細は西岡(2003)を参照。

- (i) a. Taroo-wa [NegP [SC *nani-o* *gimon-ni-mo*]_i ^{NCI} [vP *ti kanzi*]-nakat]-ta
 b. Taroo-wa [NegP [vP *dare-ni soodan-φ-mo*] ^{NCI} *si-nakat*]-ta
 (Cf. Taroo-wa [NegP [vP *dare-ni soodan-si-mo*] ^{NCI} *si-nakat*]-ta)

9. ここでは、Kishimoto (2001)に従い、Taroo-niが顕在的に[Spec, TP]に移動しTのEPPを満たしているため、主格付目的語(nominative object)であるnani-gaは顕在的にはvP内にある構造を想定しているが、nani-gaが仮に顕在的に[Spec, TP]へ移動していても本稿での議論は影響をうけない。
10. Kishimoto (2001)は、(28c)の主格付目的語はLFにおいて[Spec, TP]へ移動すると想定している。
11. (35)(36)においてXP, YP, ZPが指定部位置にあるか、付加部位置にあるかは、議論に影響しない。Kishimoto (2001)では、目的語、付加詞が素性照合のために隠在的にvPの指定部位置へ範疇移動すると仮定しているので、厳密には目的語、動詞句修飾付加詞のwh句はYPの位置にあるといえる。
12. C-統御は、Mergeにより導出される関係である。(Cf. Chomsky (2000, 2001), Epstein (1999))
13. Chomsky (2000:125)では、照合領域(checking domain)の概念も不要であることが述べられており、Chomsky (2001:28)では、最小領域(minimal domain)に基づく等距離(equidistance)の概念も不要であることが論じられている。
14. これらにおいては、wh句がvP内位置へ再構築されると考えられるかもしれないが、A-移動要素の再構築が許されないことを支持する議論として、Chomsky (1993, 1995), Lasnik (1999, 2000), Boeckx (2000), Manzini and Roussou (2000), 西岡 (2005)等を参照。
15. さらに、前節で見た(24)のようなwh(...)-moのNCIとしての振る舞いもKishimoto (2001)の分析のみでは説明できない。Kishimoto (2001:599, fn3)もこのような事例は認めているが、単に事実の記述に留まっている。
16. Kuroda (1965)は当時の生成文法の枠組みに基づき、深層構造(Deep Structure)で文全体にmoが付いた構造を想定し、それから文中の構成素に付き(mo-Attachment)、文全体に付いたmoを削除する(mo-Deletion)という変形規則を提案した。Aoyagi (1998, 1999)は、moをLFでTへ移動させ、そこからc-統御領域内にある焦点化される要素と結びつくという分析を提案している。本稿での分析のメカニズムはmoのwh句の認可が機能範疇を介する間接的なものであるという点で、Aoyagi (1998, 1999)と同様のものであるが、moが関連づけられる機能範疇がTP外にあるという点では、Kuroda (1965)に近い。Aoyagiがmoの移動先を(それより上位ではなく)Tとする唯一の根拠は、waが付いた主題語句がTPの指定部にあることを前提とした以下のような事例である。しかしながら、多くの研究者の主題語句はTP外にあると想定に反する(cf. Saito (1985), Kuroda (1988))。この点については稿を改めて論じる。

- (i) (昨日のパーティではメアリーが酒を飲んだだけでなく...)
 a. ?? [TP John-wa [vP [VP *susi-o* *tabe*]]-mo *si-ta*]

b. ?? [TP John-wa [vP [VP [DP susu]-mo tabe]]-ta]

17. Agreeのみからは、[+FOC]の移動は生じない。Chomsky (1995)で提案された素性移動分析に基づけば、(40a)でEPP素性の想定は不要である。しかし、Chomsky (2000, 2001a, b)が主張するように素性移動はないとすると、EPP素性の想定が必要となる。その場合にも、Watanabe (1992)の分析に倣って、音形をもたないゼロ演算子を想定することも可能であろう。本稿では技術的詳細については立ち入らず、Agreeを通してmoの解釈可能な素性がFocへと移動すると仮定する。
18. Puskas (1997)は、Rizzi (1997)の提案に従い、ハンガリー語に(i)の節構造を提案している。
- (i) [TopP Spec Top [FocP Spec Foc [IP Subj VP I⁰]]]
19. Chomsky (2001b:2)は、「そうでないという強い証拠がない限り、変異は容易に発見できる特性に限定し、言語は一律であると仮定せよ (In the absence of compelling evidence to the contrary, assume languages to be uniform, with variety restricted to easily detectable properties of utterances)」と主張する。
20. Kishimoto (2001)に倣い、(28c)の主格付目的語はLFにおいて[Spec, TP]へ移動すると想定する(註10参照)。また、派生は厳密に下から生じると仮定し、[Spec, TP]への移動操作の方が、moとFocのAgree操作に先行すると考える。
21. (51B)と(55B)との間に明らかな違いを見出す(著者を含む)インフォーマントと、違いがないとするインフォーマントがいる。ただしこの違いを認めないインフォーマントも(28)(34)と(37)の間には明らかな違いを見出している。これは、形態的に焦点であることを示すwh句とそうではない要素との間の違いに起因していると考えられるが、この点はデータの精緻化を含め今後の課題とする。
22. 詳細は、西岡 (2005)を参照。

参考文献

- Aoyagi, Hiroshi (1998) *On the Nature of Particles in Japanese and its Theoretical Implications, Doctoral dissertation*, University of Southern California, Los Angeles.
- Aoyagi, Hiroshi (1999) "On Association of Quantifier-like Particles with Focus in Japanese," *Linguistics: In Search of the Human Mind—A Festschrift for Kazuko Inoue*, ed. by Masatake Muraki and Enoch Iwamoto, 24-56, Kaitakusha, Tokyo.
- Aoyagi Hiroshi and Toru Ishii (1993) "On NPI Licensing in Japanese," *Japanese / Korean Linguistics* 4, ed. by Noriko Akatsuka, 295-311, CSLI Publications, Stanford University.

- Boeckx, Cedric (2000) "A Note on Contraction," *Linguistic Inquiry* 31, 357-366.
- Chomsky, Noam (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Ken Hale and Samuel Jay Keyser, 1-52, MIT Press, Cambridge MA.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 98-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001a) *Beyond Explanatory Adequacy*, MIT Occasional Papers in Linguistics 20.
- Chomsky, Noam (2001b) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Epstein, David Samuel (1999) "Un-Principled Syntax: The Derivation of Syntactic Relations," *Working Minimalism*, ed. by Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 317-345, MIT Press, Cambridge, MA.
- Haegeman, Liliane (1995) *The Syntax of Negation*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Kato, Yasuhiko (1985) *Negative Sentences in Japanese*, *Sophia Linguistica* 19, Sophia University.
- Kawashima, Ruriko and Hisatsugu Kitahara (1992) "Licensing of Negative Polarity Item and Checking Theory: A Comparative Study of English and Japanese," *Proceedings of Formal Linguistic Society of Mid-America* 3, 139-154.
- Kishimoto, Hideki (2001) "Binding of Indeterminate Pronouns and Clause Structure in Japanese," *Linguistic Inquiry* 32, 597-633.
- Klima, Edward E. (1964) "Negation in English," *The Structure of Language*, ed. by Jerry A. Fodor and Jerrold J. Katz, 246-323, Prentice-Hall Inc., Englewood Cliffs, NJ.
- Koopman, H. and D. Sportiche (1991) "The Position of Subjects," *Lingua* 85, 211-258.

- Kuno, Susumu (1995) "Negative Polarity Items in Japanese and English," *Harvard Working Papers in Linguistics* 5, ed. by Samuel Epstein Höskudur Thráinsson, Steve Peter, Andrea Calabrese, Bert Vaux and Susumu Kuno, 165-197, Harvard University.
- Kuroda, S.-Y. (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*, Doctoral dissertation, MIT. [Published by Garland, New York, 1979]
- Kuroda, S.-Y. (1988) "Whether We Agree or Not: A Comparative Syntax of English and Japanese," *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, ed. William J. Poser, 103-143, CSLI Publications, Stanford, Calif.
- Manzini, Maria-Rita and Anna Roussou (2000) "A Minimalist Theory of A-Movement and Control," *Lingua*, 409-447.
- McGloin, Naomi H. (1976) "Negation," *Syntax and Semantics* 5: Japanese Generative Grammar, ed. by Masayoshi Shibatani, 371-419, Academic Press, New York
- Miyagawa, Shigeru (2001) "The EPP, Scrambling, and Wh-in-Situ," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 293-338, MIT Press, Cambridge, MA.
- 西岡宣明 (1998) 「日英語の否定文に関する統語的一考察」*JELS* 15, 141-150.
- Nishioka, Nobuaki (1999) "On Sentential Negation and the Licensing of Negative Polarity Items in English and Japanese: A Minimalist Approach," *English Linguistics* 16:1, 25-54.
- Nishioka, Nobuaki (2000) "Japanese Negative Polarity Items *wh-MO* and *XP-sika* Phrases: Another Overt Movement Analysis in Terms of Feature-Checking" *Syntactic and Functional Explorations: In Honor of Susumu Kuno*, pp.159-184, Kurosio Publishers, Tokyo.
- 西岡宣明 (2002) 「否定対極表現の認可と再構築現象について」『*JELS* 19』, 156-165.
- Nishioka, Nobuaki (2002) "In Defense of PolP in English," *Studies in Literature* 99, Kyushu University.
- 西岡宣明 (2003) 「*Wh-* (. . .) *MO* 構文の認可条件について」、福岡言語学会編、『言語

学からの眺望2003』73-87, 九州大学出版会.

Nishioka, Nobuaki (2004) "Quantifiers and Negation: A Minimalist Approach to Partial Negation, *English Linguistics* 21:2, 323-347.

西岡宣明 (2005) 「英語の否定対極表現と文否定の認可に関する統語分析」『英文学研究』81, 17-40.

Puskas, Genoveva (1997) "Focus and the CP domain," *The new comparative syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 145-164. London: Longman

Rizzi, Luigi (1982) *Issues in Italian Syntax*, Foris, Dordrecht.

Saito, Mamoru (1985) *Some Asymmetries in Japanese and their Theoretical Implications*, Doctoral dissertation, MIT.

Sohn, Keun-Won (1995) *Negative Polarity Items, Scope and Economy*, Storrs, University of Connecticut dissertation.

Sohn, Keun-Won (1996) "Negative Polarity Items and Rigidity of scope," *Japanese/Korean Linguistics* 5, ed. by Noriko Akatsuka, Shoichi Iwasaki and Susan Strauss, 353-368. Stanford, CSLI Publications, California.

Yoshimoto, Yasushi (1995) *The Terrain and Locality of Negative Polarity Items*, Doctoral dissertation, University of North Carolina at Chapel Hill.

Yoshimoto, Yasushi (1998) "The Strong [neg] Feature of Neg and NPI Licensing in Japanese," *Japanese/Korean Linguistics* 8, ed. by David J. Silva, 529-541, CSLI Publications, Stanford, California.

Watanabe, Akira (1992) "Subjacency and S-Structure Movement of Wh-in-Situ," *Journal of East Asian Linguistics* 1, 25-291.

Watanabe, Akira (2001) "Decomposing the NEG-Criterion," *Romance Languages and Linguistic Theory 1999: Selected Papers from 'Going Romance' 1999*, Leiden, 9-11 December, ed. by Yves D'hulst, Johan Rooryck and Jan Schroten, 383-406. John Benjamins, Amsterdam.

Watanabe, Akira (2002) "Feature Checking and Neg-Factorization in Negative Concord," *Proceedings of the Sophia Symposium on Negation*, ed. by Yasuhiko Kato, 51-77, Sophia University, Tokyo.

Zanuttini, Raffaella (1991) *Syntactic Properties of Sentential Negation: A Comparative Study of Romance Languages*, Doctoral dissertation, University of Pennsylvania.